

# 滋賀県愛知郡愛荘町・常照庵の木造不動明王二童子像の調査報告

公益財団法人秀明文化財団 (MIHO MUSEUM) 理事／成安造形大学附属近江学研究所客員研究員

高梨 純次

# 滋賀県愛知郡愛荘町・常照庵の木造不動明王二童子像の調査報告

公益財団法人秀明文化財団 (MIHO MUSEUM) 理事／成安造形大学附属近江学研究所客員研究員 高梨 純次

Name:

Junji TAKANASHI

Title:

Research Report on the wooden statues of *Acala (Fudo Myoo) with Two Attendants* at Josho-an Temple in Aisyo-cho, Echi-gun, Shiga prefecture

Summary:

Josho-an Temple located in Aisyo-cho, Echi-gun in Shiga prefecture was founded in 17th century by a nun whose Buddhist name was Josho-in. She was a wife of Kimata Moriyasu who served Hikone domain (present day Shiga prefecture) as a top-ranking samurai official (*karo*). Two sets of Kamakura-period Buddhist statues designated in Important Cultural Properties have been handed down from generation to generation in this temple. This report is on the research of the *Acala with Two Attendants*, one of the sets.

## はじめに

滋賀県東部、湖東と呼ばれる地域の中で、天台宗の三つの古刹を「湖東三山」と呼び習わしている。そのうちの一つ金剛輪寺（滋賀県愛知郡愛荘町）は、開基を行基、慈覚大師円仁の中興と伝え、中世には多くの子院が建つ有力な天台寺院であった。その一角に寺跡を伝える常照庵は、彦根藩主井伊家の家老木俣守安の妻女で法名常照院によって承応二年（一六五三）以前に建立されたとみられる<sup>〔註1〕</sup>。この常照庵は、現在、わずかな寺地と小堂を残すのみだが、木造阿弥陀如来坐像一軀とここに紹介する木造不動明王二童子像三軀が、重要文化財に指定され、もとは庫裏であったと伝わる場所に建つ文化財収蔵庫に安置されている。

私事に亘って恐縮ながら、この常照庵のすべての重要文化財指定の像については、平成二十三年（二〇一一）に、MIHO MUSEUM、滋賀県立近代美術館、大津市歴史博物館で合同開催された「神仏います近江」展にご出品いただいた<sup>〔註2〕</sup>。当時、私は滋賀県立近代美術館で「第二部 祈りの国、近江の仏像―古代から中世へ―」のパートを担当、この二件四軀の尊像を展示・公開させていただいた。事前に、写真撮影を中心として、輸送や展示に関わる

保全確保のためもあって、作品調査もさせていただいた。しかし、正直に言うと、調査の主たる眼目は、木造阿弥陀如来坐像と金剛輪寺の本堂須弥壇に安置される、近江講師経円の手になる木造阿弥陀如来坐像との比較検討にあったといつてよい。頭体幹部を巨木一材製として、前後と左体側を割刳ぐ技法が共通するものであり、極めて特異な仕様になる二像が近接した場所に伝えられているからである。

一方、この三尊像については、まことに量感のある中尊像の洗練された作風に魅せられるとともに、特に股間にみられる截金と彩色文様の鮮やかさに注目が集まった。その彩色も、少し浮きや剥離がみられるものの、致命的なものではないと判断し、展覧会で展示・公開させていただいた。また、『秦荘の歴史』に、簡単な資料紹介が掲載されている<sup>〔註3〕</sup>。

しかし、館の展示ケース内に安置し、日常業務として状態をチェックするなどしていると、不動明王像の鮮やかな彩色について、違和感を覚えてきた。有り体に言ってしまうと、この股間の彩色のみが際立って残りが良い、ということである。展覧会期間中は、忙しさに紛れてその違和感に向き合うことが出来なかったが、今回、お寺のご厚意により、再調査できることになった。今回は、複数のメンバーによる詳細な目視調査とともに、写真撮影、また赤外

線撮影も実施し、ある程度の報告ができることとなった<sup>〔註4〕</sup>。以下は、その調査結果の報告である。

しかし、拙稿の内容は、淡々と調査内容を記述してゆくものであり、いわば極めて退屈な記述になっている。このような報告の掲載を許可して頂いた、近江学研究所には感謝しかない。重ねて機会があれば、この調査の成果に基づいて、この三尊像についての考察ができれば、喜ばしい限りである。

## 尊像の調査報告

以下、木造不動明王二童子像の概要について説明する。不動明王立像は像高一〇八・五センチ、制吒迦童子半跏像は像高二十九・九センチ、矜羯羅童子立像は像高五十四・二センチ<sup>〔註5〕</sup>。いずれも木造、彩色、玉眼、重要文化財に指定されている。以下、各像の概要について説明してゆく。

### (一) 木造不動明王立像(写真1～8)

#### 【形状】

巻髪として、左肩に弁髪を垂らす。額に皺を刻む。眉を彫出し、両目を見開いて玉眼を嵌入する。目は、瞳を墨として周囲を青・金・墨で括り、白目を表して周縁を赤で縁取る。鼻孔を表し、閉口して上下牙出し、上歯列四本で下唇を噛む。首の正面全体に三道を刻出し、胸の括れとその下に腹の括れ各一条を彫出し、臍を凹める。条帛をかけ、先端は正面で下層より垂下し、背面では肩下で上層より垂下する。

腰布をめぐらして正面で結び、結びの先端が股間の左右に垂下する。裳は腰で折り返し、左側の布を外にして、正面右脚の内側辺りで打ち合わせる。銅製鍍金の、胸飾・臂釧・腕釧・足釧をつける。右腕は垂下しながら屈臂して、右腰前で三鈷剣を握り、左腕は垂下しながら左前に突き出し、掌を上にして絹索を握る。両脚は、脛の半ば以下を露出し、左足を外に向け、足裏の角柄で岩座に立つ。

台座は、框の上に岩座とし、框に火炎光背をさす。

#### 【彩色】

前記したように、正面股間の彩色は、大正の修理時に復元されたものと考えられる。全体を見渡しての違和感があり、かつ大正十三年の修理調査の見積内訳に、多種の顔料が挙げられており、この復元彩色に用いたとみられる<sup>〔註6〕</sup>。従って、裳の彩色についてはそれも参考として、表面の観察や赤外線撮影の画像によって記述してゆく。

白地彩色。頭髮は黒で、肉身部は青黒色。条帛の表は、周縁部を截金二本の界線で区分する。内区は朱地(一部に橙色の彩色も見えるが)と思われ、地文様として截金で田相繫様の正方形の列を作るように、円で括った団花文を置く(赤外線撮影1-1)。腰布は、縁を二本の截金二組で括り、周縁と内区を分ける。周縁部は、青か緑系の地色とする。衣文の峰に截金線を置く(赤外線撮影1-2)。内区は分割して外側には縹縹彩色による猪目様の花文が雲気文を連ね、内側には同様の三弁花を描く。

裳は、縁を彩色と截金で縁取りし、周縁部と内区を截金で区画する。周縁部は、さらに截金で二区に分ける。その外縁は色帯で縁どる。外帯は内帯より幅広で、先が割れた七弁花(赤外線写真では、判然としないが六弁花様のものが見えるか、赤外線撮影1-3・1-4)を中心として左右に蔓を絡めて繋ぐ。内側帯は、斜線二本を交叉させて四区画した四弁花で、内側から緑系二段、その外にやや大振りの朱と橙色の縹縹彩色として金で括る。その両外に、緑系とみられる三山の雲形のような形をおき、その先は三方向に三弁の冠形をおいて周囲すべてを橙色の線で括り、その外側には朱系・橙色系の縹縹で緩いカーブの三弁を配する。この単位の花形の間隔の真ん中に六弁花の半折を上下に配し、その間を繋ぐ(判然とはしないが、四弁花の連なりの様な色料の重なりなどが認識できる、赤外線撮影1-3・1-4)。

内区の表を復元彩色によってみてゆくと(写真7【裳の彩色】)、地文は截金で正方形を斜めに連ねた斜格子で、交点には二重の正方形を描き、内部は八角形の中に四つ目を表す。その一部に截金で縁取りした空間を作り、中心から白黄系の四弁、内から濃朱・淡朱・淡橙色・白の縹縹で先端を三つにする八弁を表す。その外に、同様の縹縹による蕊二段とし、外側を濃緑とする六葉とその間に緑の三弁を置いて全てを白で括る。その外側には、中心を黄白から白をおき周囲を朱で括った内側が巻き込む猪目を連ねる。彩色は明らかではないが、左大腿部などに比較

的明瞭な前記した縹緗彩色の宝相華文や、截金などが確認できる（右大腿部側面などで宝相華文の形が捉えられている、赤外線撮影1-5）。裳の裏側は復元されていないが、周縁部は黄白系の色料が地色とみられ、縁を截金で括るよう、内区には内部に模様を納める二重菱繋ぎや小さな花丸文がみえる（明瞭には捉えられないが、花文などがあるか、赤外線撮影1-6）。復元された地色や地文、彩色文様などは一応当初の姿を表しているとみてよい。

### 【構造】

針葉樹材（ヒノキ）製。頭体幹部は、頭頂より背面地付高二十九センチまでと正面の裳先までを構成し、耳後ろから体側で前後に割放ち、三道下で割首として、内割りする。面部は別材製として玉眼を嵌入する。両膝以下足柄までを幹部材に差し込み（両足ともに外側に木心を外す材）、両足先は別材製とする。背面側の裳先は、両側各一材と中央に一材を刳いで構成する。両肩以下は、肩・肘・手首などで刳ぐ。

### 【保存】

後補については、検討を要するが、玉眼、金銅製装身具などが課題となる。正面股間の鮮やかな彩色は、大正修理時の復元とみられる。持物。台座・光背は後補。

## （二）木造制吒迦童子半跏像（右脇侍）（写真9・14）

### 【形状】

髪は全体を平彫として、髪際に髪筋を截金で表し、後方に七束にして流し、先端を巻く。眉を彫出し、目を見開いて玉眼を嵌入する。目は、瞳を墨彩し、周囲を白群として墨で括り、白目を表す。鼻孔を穿つ。開口して、犬歯様の上牙を下出し、上下の歯列と舌を表す。やや右前を睨み、怒号する構え。胸と腹の括れ各一条を表す。大きな肩布を、背面左方から正面の左肩と両胸を覆い、右肩に被せて背中を大きく覆い、左肩から首下に潜らせて右胸で下層から垂下させ、腹前を横切って左後方になびく。腰布を巡らせて尻でふみ、正面で結ぶ。折り返し付きの裳を着ける。臂釧・腕釧・足釧をつける。右手は垂下して膝後ろで岩座につき、宝棒を握る。左手も左膝後ろで、肩布の先端近くを握る。岩座上で、左足を立膝状にしてやや浮かし、その内側を右足が交差するように通る。

台座は、框の上に岩座。

### 【彩色】

白地彩色。肉身体部は、頭部も含めてやや黒い朱彩とする。頭部は全体を朱彩し、頭髪は薄く墨彩し、髪際では髪筋に截金をおく。眉毛を墨彩し、唇はやや薄く墨をかけ、口中と舌は薄黒い朱彩とし、歯は白とする。肩布の彩色は判然としないが、黒みがかった黄土色の地色として、早蕨状の繋ぎ文のようなものがみえる（赤外線撮影2-1）。裏は黄土地にみえ、

白の点が複数残されている。

腰布も判然としない。表は地色が黒化しているが緑もみえる。表層は剥落が多く、丸菱様の輪郭らしきものがみられるが、基本的に不明。

裳の周縁部は、赤黒い地色があり、早蕨状の色料による痕跡がみえる。内区は、地文を截金の雷文とし、窠文を配する（赤外線撮影2-2・2-3）。右大腿部のは朱系の二本線で括り、内部は黒化した緑かとみられる色で中を埋め、中央に黒化した八点を巡らす八弁花を置く。左腰奥の折返しの下では、截金の雷文繋ぎとともに朱の地色の上に、内に巻き込まれた猪目様の黒化した線などがみられる（赤外線写真では、周縁を色線で両端を別の色料で括り、内部には両端が内に巻き込む雲文様の線描がみえる、赤外線撮影2-4）。裏面は、周縁部と内区を分け、周縁部は黒化した地色があり、内区は黄土系の地色が認められる（赤外線写真では文様などの有無を厳密には確認できない）。

### 【構造】

針葉樹材（ヒノキ）製とみられる。頭体幹部は、基本前後二材製とし、首下で割首として大きく内割りし、像内の大半は黒漆塗りとする。二材製とはいえ、比率的には、両側面の大半を前面材から構成しており、背面材は頭部から背面のやや右側寄りに地付高四・八センチまでを構成するもので、背板風にもみえる。割首については、背面側の頭部の材が、体部に深く食い込んでいる。背面地付高四・八セン



チは別材を矧ぐ。両脚部は、幹部前面材の前に奥行き二・五センチの材を矧ぎ、その前に大きく一材を矧いで大半を表し、左足首、左足裏真中で矧ぎ、右足真中で矧ぐ。両肩以下は、幹部材との矧ぎ面に板材をあて（左肩矧目は八センチ×三センチの材が像内から観察でき、右肩にも認められる）、左腕は肩・肘先・手首で、右腕は肩・手首で別材を矧ぐ。腕釧、足釧の結びなどは別材製。

### 【保存】

後補については検討を要するが、地付は全て修補。金属製装身具・持物は後補。台座後補。

### （三）木造矧羯羅童子立像（左脇侍）（写真15（20））

### 【形状】

髪は平彫として髪際を表し、左右に美豆良状に束ね、後頭部では中央で左右に振り分ける。耳の前に、髻髪を墨描する。目は右方を見るように開く。玉眼嵌入、瞳は墨彩し、周囲を茶色として墨で括り、白目を描いて、目尻・目頭に朱を入れる。閉口する。胸・腹の括れ一条を表し、臍の括れも長く表す。条帛を背面では折り返ししながら巡らせ、先端を、正面は左胸で下層から、背面では右肩から直線的に上層より垂下する。腰布を巻いて、正面で結び、その両端が股間両脇を垂下する。裳は腰でわずかに折り返し、正面では膝下あたりまで、背面では足首上までを覆い、左からの布を外にして、正面やや右で打ち合わせる。胸飾をつけ、臂釧・腕釧と足釧を装着する。

右腕は垂下して、第一・二指で長茎の蓮華を執り、左腕は屈臂して前に突き出し、第一・三・四・五指を曲げて、独鈷杵を握る。腰をわずかに右に振り、左足を斜め外に向けて、足裏の角柄で岩座に立つ。台座は、框の上に岩座。

### 【彩色】

白地彩色。肉身部は朱系の肉色彩色。頭髮は薄く墨塗り。

条帛の表は、両端ともに二状の截金で周縁部と内区を分ける。周縁部は、縁に截金一条を入れ、地色は内区とともに朱彩。内区は、朱の地色の上に、截金で斜格子を表す。裏は黒化した地色が視認できるのみとなる。

腰布の表は、地色が青かとみられ、截金二本で周縁部と内区を分ける。周縁部の詳細は不明で、地色は内区と同色かとみられる。内区の文様は視認しにくい、赤外線写真なども併用して推測すると、艶やかな大振りの花を表し、周縁部の境となる截金線より上に、五点を半円形に打ちその周縁に丸い花卉を描くような影がみえる。全体として、唐草状に宝相華をつなげながら、全体に花唐草があしらわれていると推測される（赤外線撮影3-1）。

裳は、截金三本で周縁部と内区を分ける。周縁部の縁は朱系の色帯を回し、黄土色系の地色の上に花唐草で満たす。内区は、地色を朱地としてその上やや黒ずんだ色をかけるようで、截金五本を一単位とする麻葉繫ぎを地文とする。その中に、截金二本

で丸く囲った中、中心に点を描いて周囲に六弁を表し、上下左右に一単位の花蔓を配した団花文を布置する。

### 【構造】

針葉樹材（ヒノキか）製。頭体幹部は、木心を正後方に外すとみられる一材製で、耳後ろから体側、踵のあたりで前後に割放ち、首下で割首として内刳りする。右肩以下は、肩・手首・指で矧ぎ、左肩以下は、肩・肘・手首・第二指を矧ぐ。美豆良、天衣遊離部、腰布の結び垂下部、右足は別材製とする。

### 【保存】

後補は、右足裏の角柄、金銅製装身具、持物。台座。

### まとめにかえて

以上、三尊像の調査結果について、彩色は視認と赤外線撮影の分析をもとに述べてきた。既に紙数を大きく超過しているので、これ以上の検討は、機会を改めて行いたい。何れにしても、十三世紀初頭あたりの造像と推測できる。その一具性についての検討をはじめ、常照庵に伝えられる経緯の推測など、全てを課題として、筆を置くこととする。

## 註

1. 『近江愛智郡志』巻五「第十章 秦川村 常照庵」の記載、および掲載史料による。なお、木保安や関連史料について、彦根城博物館渡辺恒一氏よりご教示を得た。

2. 神仏います近江実行委員会編集・発行『特別展 神仏います近江』図録「第二部 祈りの国、近江の仏像―古代から中世へ―」に掲載。

3. 寺島典人「21木造不動明王二童子像」（秦荘町史編集委員会『秦荘の歴史 第四巻 資料』二〇〇九年）。

4. 調査は令和二年（二〇二〇）十月二十七日に実施した。参加者は、和澄浩介（滋賀県立琵琶湖文化館）、三井義勝（愛荘町立歴史文化博物館、桑原康郎、一村武司、辻上祐貴（以上 MIHO MUSEUM）の各氏と筆者。ここで述べている調査報告は、参加者の意見を集約したものであるが、文責が筆者にあることは言うまでもない。写真撮影は小池澄男氏（MIHO MUSEUM）による。

5. 今回の調査時に計測した法量の細目は、下表（表1）の通り。

6. 滋賀県文化財保護課古川史隆氏のご教示による。大正十三年修理時の、修理計画書及び見積書の中で、経費の内訳を箇条書きしている。その中には、「木材」から始まる材料の品目と数量が順次記録されている。そこには、「朱」「岱砂棒」「藍棒」「胡粉」「鉄粉」「真菰墨」「白緑」「緑青」「群青」「金箔」「金粉」が挙げられている。主に、彩色の復元に用いるためと推測できる。

調査を御許可いただいた、常照庵当局に心からお礼を申し上げます。また、赤外線撮影は和澄・桑原両氏の手になるものを掲載しました。併せて感謝申し上げます。

表 1

| 法量（単位は cm） | 不動明王立像      | 右脇侍・制吒迦童子像    | 左脇侍・矜羯羅童子蔵  |
|------------|-------------|---------------|-------------|
| 総高         | 131.6       | 48.9          | 69.1        |
| 像高         | 106.9       | （坐勢）30.2      | 54.0        |
|            |             | （足裏）36.7      |             |
| 髪際高        | 103.0       | （坐勢）29.0      | 53.3        |
| 頂一顎        | 17.1        | 10.8          | 10.0        |
| 面長         | 12.5        | 9.1           | 7.9         |
| 面幅         | 10.1        | 6.8           | 6.2         |
| 耳張         | 14.9        | 8.8           | （耳朵）7.7     |
|            |             |               | （美豆良）11.9   |
| 面奥         | 16.3        | 10.2          | 9.4         |
| 胸奥         | （左・含条帛）17.0 | （左・含背面布）11.1  | （左・含条帛）10.3 |
|            | （右）16.4     | （右・含肩布）11.1   | （右）9.1      |
| 腹奥         | 17.5        | 10.7          | 9.9         |
| 肩張         | 23.1        | 12.3          | 12.6        |
| 肘張         | 35.3        | 22.9          | 18.4        |
| 裾張         | 26.0        |               | 14.5        |
| 足先開（外）     | 26.6        |               | 11.9        |
| 足先開（内）     | 18.3        |               | 6.6         |
|            |             |               |             |
| 膝張         |             | 21.9          |             |
| 膝奥         |             | （左足指―腰奥）30.7  |             |
|            |             | （右手指―左布端）29.1 |             |

| 台座・光背（最大） | 不動明王立像 | 右脇侍・制吒迦童子像 | 左脇侍・矜羯羅童子蔵 |
|-----------|--------|------------|------------|
| 台座・左右     | 72.9   | 36.4       | 36.3       |
| 台座・奥行     | 57.2   | 28.2       | 28.0       |
| 台座・高さ     | 33.8   | 21.5       | 23.9       |
| 光背・高さ（含柄） | 157.5  |            |            |
| 光背・左右     | 65.2   |            |            |



写真 2 同（右斜め）



写真 1 木造不動明王立像（正面）

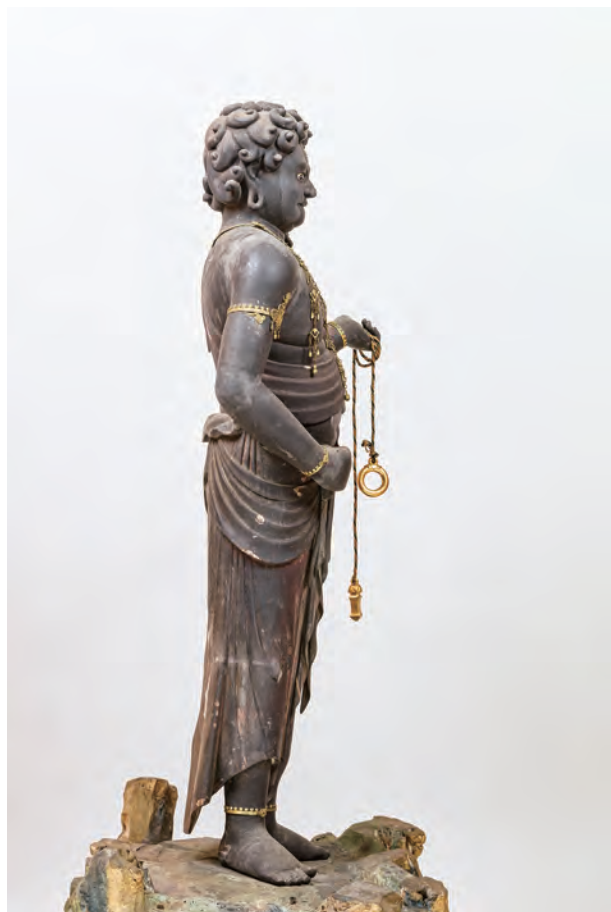


写真 4 同（右側面）

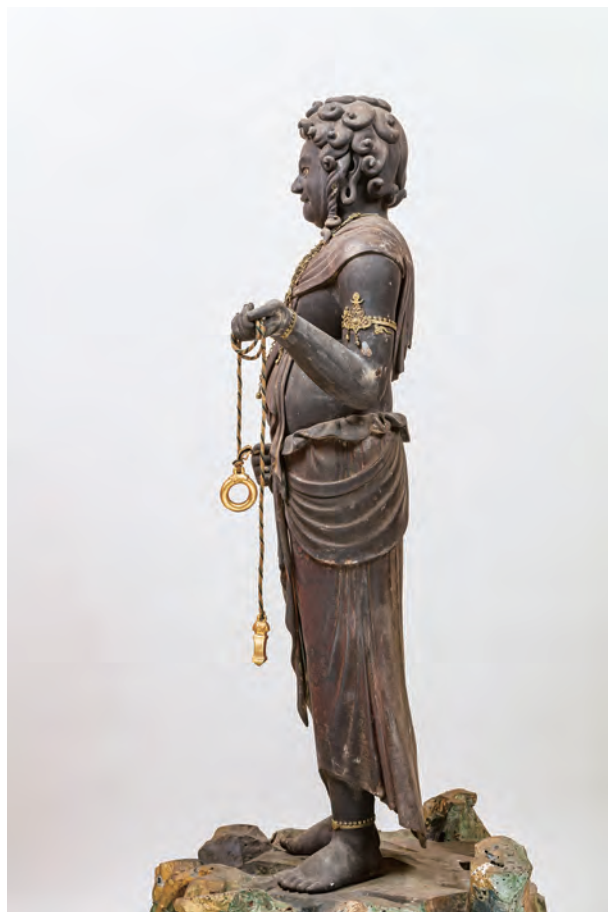


写真 3 同（左側面）





写真6 同（像底）

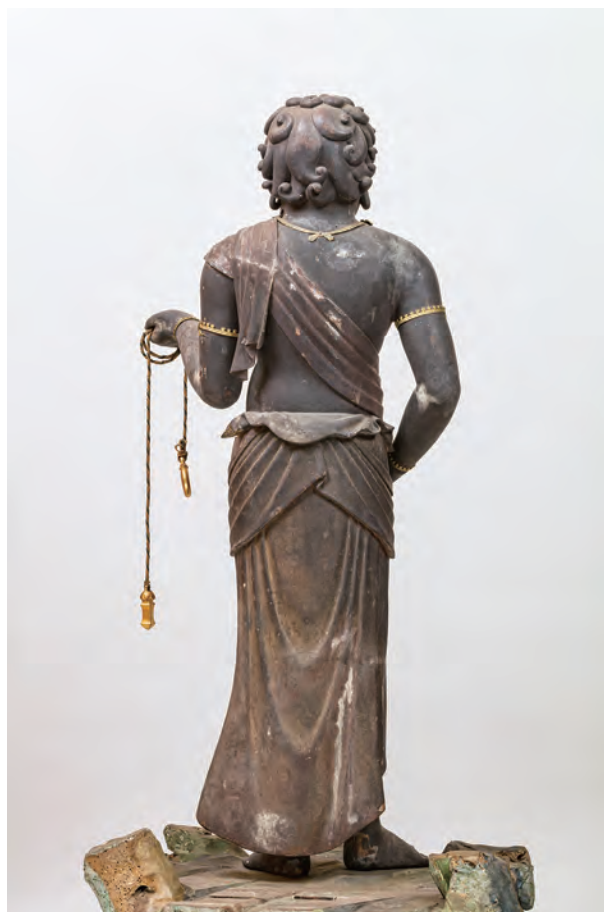


写真5 同（背面）



写真8 同（裳などの彩色・下半身右側面）



写真7 同（裳の彩色・復元か）





写真 10 同（右斜め）



写真 9 木造制吒迦童子半跏像・右脇侍（正面）



写真 12 同（右側面）



写真 11 同（左側面）



写真 14 同（像底）



写真 13 同（背面）



写真 16 同（右斜め）



写真 15 矜羯羅童子立像・左脇侍（正面）





写真 18 同（右側面）



写真 17 同（左側面）



写真 20 同（像底）

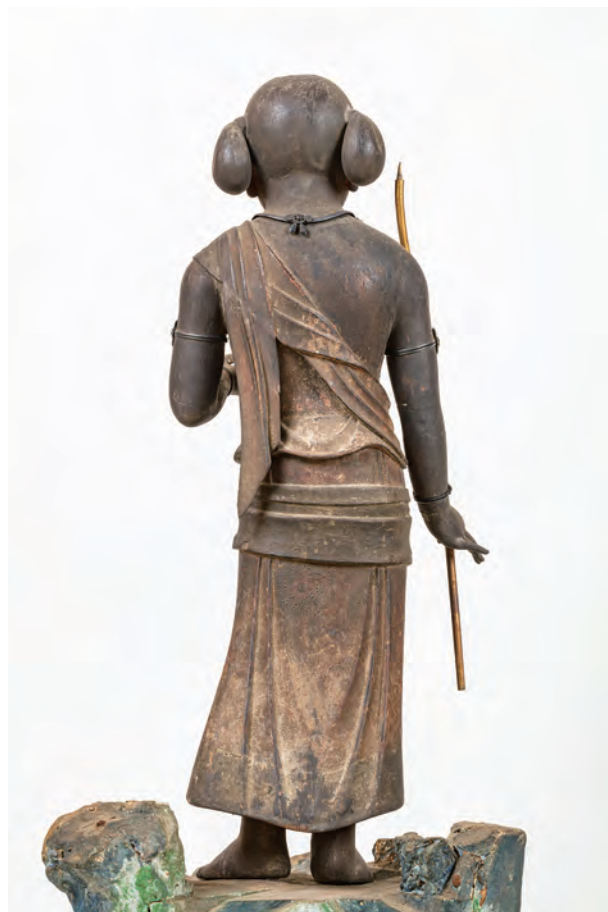


写真 19 同（背面）





赤外線撮影 1-2



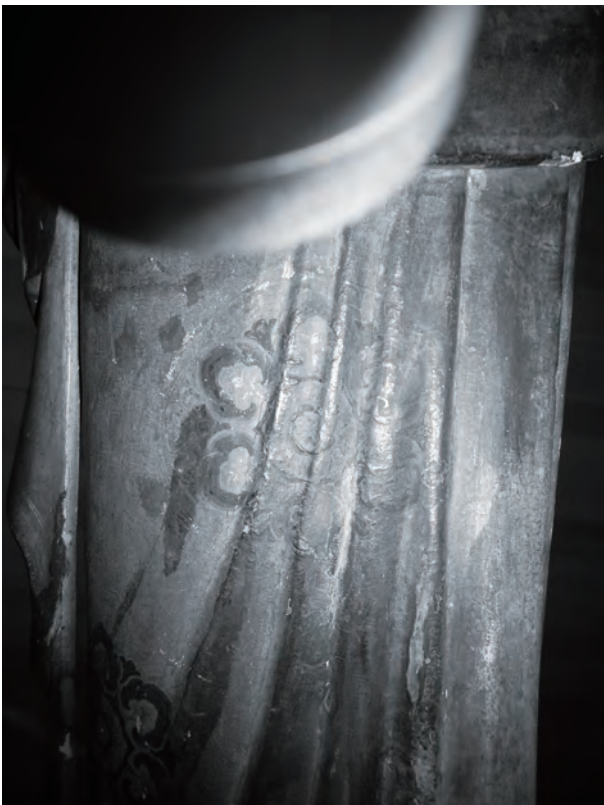
赤外線撮影 1-1



赤外線撮影 1-4



赤外線撮影 1-3



赤外線撮影 1-5





赤外線撮影 2-1



赤外線撮影 1-6



赤外線撮影 2-3



赤外線撮影 2-2



赤外線撮影 3-1



赤外線撮影 2-4





## 編集後記

一年前の前号の編集後記で、新型コロナウイルスの流行のニュースが連日報道されていることを書いていました。今も状況は好転することなく、日々、グラフや映像で視覚化された目に見えないものの脅威に対して新しい生活様式を実践しながらコロナ後の未来を模索しています。人との距離をとり、マスクで表情も読み取りにくい、それだけでも日常の暮らしやハレの日、お祭りや行事に多大な影響があります。この一年間は日常を自粛し、ハレの日の多くが縮小や中止となりました。日本の文化が凝縮され継承されてきたハレの日の「かたち」や暮らしの「かたち」、「ハレとケ」のありようが今後どのように変わっていくのか大変気がかりです。

本紀要では客員研究員と本学研究員からの論考三編を掲載します。

高梨客員研究員からは、愛知郡愛荘町・常照庵の木造不動明王二童子像の調査報告を寄稿していただきました。加藤研究員の論考は、天津市真野北村地区に今も続く庚申講の調査について、庚申信仰と三井寺や天津絵との関わりなどにも触れ、地縁のコミュニティの意義を考察しています。石川研究員は、東近江市五個荘の宮荘の取材と大学近郊の天津市仰木の取材および学生との活動について「近江の懐をめぐる4」というかたちで紹介しています。近江学の講座はこの一年間すべて中止となったため、「講座の報告」はありません。

編集担当 永江弘之

## 成安造形大学附属近江学研究所 紀要 第10号

発行日 令和3年3月25日

発行 学校法人京都成安学園 成安造形大学  
附属近江学研究所

〒520-0248

滋賀県大津市仰木の里東4-3-1

電話 077-574-2118

小寄善通

編集 成安造形大学附属近江学研究所

印刷所 株式会社北斗プリント社